

僕等は地球のお世話係

現状と歴史

現在地球は危機的状況にある。資源の争奪により枯渇していく地下資源。人口爆発による乱開発、森林の減少・砂漠化…。どれひとつとっても地球は危機を迎えている。

この問題に関して私たちはどう取り組めばよいのか？ニュースでしばしば環境に関する国際会議の話題を耳にする。しかし会議の意義は認めながらも、各国の利害の主張ばかりで結論は持ち越され、何も決まらないことを私たちは知っている。結局国レベルでは誰もそのことを真剣に取り組もうとしていないのだ。つまりこの問題は国レベルで考えるものではないのだ。ではどうすればよいのか。今この問題について私たち個人個人のあり方が問われているのだ。

地球が誕生してから46億年。これまでにどれだけ多くの生物がこの地球に誕生し、そして絶滅していったことだろう。弱肉強食の世界、突然の環境変化とその新しい環境へ適応したものが生き延びてきた。そしてどの時代もいずれかの生物が地球の第一人者として君臨する。それはある時代では恐竜であったし、あるときは宇宙から異星人もしくは前人類であったかもしれない。それらは化石やオーパーツから推測されるし、さらにはアカシャフィールドに残されている。

そして現在、この地球上の生物で第一人者として存在するのは人類すなわち「人間」であることは誰も疑う余地はないだろう。ではなぜ人間がこの地球上で第一人者となるに至ったのか。その点を考えてみたい。

「なぜ人間はこの地球上でこれだけの頭脳を持った存在であるのか」

現在人類は地球上の生物の中で飛びぬけて頭脳を発達させた存在である。それは人類がこの地球上で好き勝手するために得た能力なのだろうか。

地球上の生物の中で、人間にしかないもの。そして他の生物を圧倒的に引き離すことになったものは何かを考えてみるとそれは、想像し、かつ創造していくという「想像力」である。

うれしい、悲しいの感情は動物たちも持っている。飼い主が帰ってきたことに喜ぶ犬たち。また動物の親子の愛情物語は誰もがテレビなどの映像で何度も見ている。

学習能力を持っている動物たち。しつけにより人間の指示に従うようになるペット。手を器用に使いバナナの皮をむくサル。芋を海水で洗って食べる猿。絵をかくチンパンジー。すなわち彼らにも考える力や学習能力は備わっている。そして少しずつではあるがそれら

を発展させていくこともできる。もちろんそれらは人間のそのスピードに比べると断然にゆっくりとしたものではあるが…。

人間と他の地球上の生命体を決定的に違うものとしているのは、頭の中で想像し描き、それを今度は現実に造り出す力「想造力」である。この力があるかないかが決定的に違うし、この力こそが人間がこれまでの文明を発達させてきた力である。

人間はこの想造力を使い、よりよい生活の追求を行ってきた。最初は食料の安定確保だったかもしれないし、雨にぬれず、天敵から身を守る安全な住処だったかもしれない。そしてそれが達成されると次は、病気を治すこと、長生きをすることへと変わっていった。さらに産業革命後は便利、快適、楽な生活の追求へと変わっていき、個人のスタイルの追及へと向かう。

その間に、機械・電子文明はどんどん発達し、人間は機械や人工物の中で生活するようになり、気がついてみれば都会の中毎日靴を履いてアスファルトの上・コンクリートの上を歩くようになり、木々を手で触ることもない自然とは隔離された場所で生活するようになってしまった。1年のうち大半は人工物の中で過ごし、かつては日常茶飯事のことであった自然と触れ合うことは、今では特別な行事となってしまった。すっかり私たちはこの地球を意識する機会を失ってしまった。

地球という存在を意識することもなく、自分たちだけの生活しか考えなくなった結果、人類は自分達のエゴの追及に走りその結果大気・水・大地は汚染され、動植物だけでなく翻って人間自身にも悪影響を及ぼすものとなった。また各国の力の誇示が無数の原爆を持ちその威力は、地球を何度も破壊するだけの力を持つものとなった。

人間はいつの間にか地球にとって悪性のがん細胞となり、それはどんどん転移し広がり地球を蝕み、ついには地球を持続不可能な状態にしつつある。そうまさに今地球は「アンインハビタブル アース」へと変わろうとしているのである。

今中国は 30 年前の自転車の時代から車社会へと変わった。インドもしかり 30 万円で新車が売られるようになった。ロシア、ブラジルなどの BRISC 諸国も経済発展に伴いより快適な生活を追及するようになってきている。そのために資源の消費は莫大な量へとなり、森林は切り開かれ地球は見るも無残な姿に変わろうとしている。このまま人類が今の生活を続けていくなれば、地球はあつという間に枯れ果てた星となってしまいうだろう。

けれどもどうして私たちは、中国や東南アジア・インド・BRISC 諸国の人々に経済発展をやめ、便利で快適な生活の追求をすることはやめろといえるだろうか。これまで私たち先進国だけが快適な生活を求めて、資源を消費しておいて、彼らにはそんなことはするのはだめだといえるだろうか。いえるはずがない。

それならば私たちは今どうすればよいのだろうか。彼らには経済発展を認め、我々はこ

れまで贅沢してきた分我慢するか。一部特定の理解ある人々はそれができたとしても、大部分の人はそんなことができるわけではない。

それならばどうすればよいのか。そこで再度必要となってくるのが「なぜ人間はこの地球上で唯一これだけの頭脳を持った存在なのか？」ということを考えることと、人間の持つ絶大な力「想造力」をどう使うかを考えることである。

人間と地球の関係

人間はいまや地球よりも偉大な存在となり、この地球を支配するだけの存在となったのであろうか。

人類の誕生を再度さかのぼってみると、人間の誕生はその人類の身体的・遺伝子的特長からみてダーウィンの進化論には疑問符をつけざるを得ない。

セガリヤ・シッチンによるシュメール文明の解読から、人類は惑星ニビルからやってきたネフィリムとアヌンナキによる当時の地球にいた原人を彼らの遺伝子とを組み合わせ作られた人工生命体アタバであった。そしてそのアタバが作られた理由とは自分達の代わりに地球の鉱物資源採取をするための奴隷であったという。

その後奴隷から解放された人間は移動と定住を繰り返し、農耕を始め、文明を築き、ルネッサンスそして産業革命を起こした。そしてその後は誰もが知っている急速な発展をし、今では地球から出て宇宙に滞在できるまでになっている。

その間に人間は一つひとつ自然の驚異を克服していった。日照りに備えダムを建設し、大雨による河川の氾濫洪水を防ぐために堤防を作り、輸送手段・農地開拓として用水路を拓き、干拓し、地形を操作するまでになる。そして今では人工地震や人工ハリケーンなど気象兵器を開発するまでになっている。

また機械文明の発達により人間は車や飛行機を発明し、かつては苦勞して登っていた山の頂上にも車で行く事ができるようになり、危険を冒し何ヶ月もかけて行っていた地球一周も飛行機で24時間もあれば1周できるまでになった。

それでは私たち人類は今では地球よりも力を持った存在となったのだろうか。確かに私たちは車や飛行機を利用すれば灼熱地帯であろうが、豪雪地帯であろうが何処までも行けるようになった。しかしながらたとえ車や飛行機で行ったとしても、その大自然の中に自分ひとり立ちそこに広がる風景を眺めてみたとき、その景色に圧倒され、いかに人間はちっぽけな存在でありこの地球に比べると微力な存在でしかないかと思う。

また身近なところでも、例えば瀬戸内海の島で海を眺めていると、その穏やかな自然風景を母なる存在と感じ、優しく包まれる気分になる。あるいは室戸岬から太平洋を眺めてみれば、その偉大さと強さは父なる存在を感じずにはいられない。

どんなに人間は科学を発達させたとして、自然を克服したように思えても、時に地球は地震や洪水などで多くの犠牲者を出し、人間は自然の脅威に恐怖し涙する。

また時に人間は山の中を歩き、途中で湧き水があると、それによって喉を潤し、歩き疲れた体が癒される。地球は人類に恵みを与えてくれると同時に、厳しさや試練を与え、人類を地球へと向きあわせる。

同時に人類は中世ヨーロッパの教会や宮殿の歴史建造物のようにその能力と創造性を圧倒的な迫力を持ってその存在感を示すこともできれば、日本の仏教建築のように自然と共生する中で、陰ながらにその芸術的美やセンスを光らせることもできる。またあるいは絵画や音楽・物語のように色や音や文字でもってその能力を表現することもできる。

つまり人間はこの地球上で、その存在は小さいながらも、その想造力を屈指してその存在を示すことができれば、時に人間は地球に向き合わされその存在について考えさせられる。それが人類の独立してからの今日までの地球との関係である。

アヌンナキはなぜ地球を人間に任せたのか

先にも書いたが、人類はネフィリム、アヌンナキが遺伝子工学を屈指することによって誕生したと考えられる。そしてその完成したアタバはほぼアヌンナキと同じような姿であった。すなわちアヌンナキは人類（ホモサピエンス）の生みの親であり、人類にとっては親というよりも神としてあがめられてきた。おそらくアヌンナキは現在人類から約 100 年進んだ技術を持ち合わせていた生命体と思われる。当時のホモサピエンスからするとアヌンナキのもつすべての技術は未知なる力であり、人類にとって彼らが神と映ったのも不思議ではない。

そして人類は彼らの鉱物資源採取のための奴隷として誕生した。その奴隷的存在であった人類がなぜ地球を任されたか。

アヌンナキは人類に「(己自身を) 知る」ことを教え、そこから人類は急速に発達していく。そして人類はアヌンナキの奴隷からペット的存在へと変わっていく。その人類の能力を見て、いつかはパートナー的存在になれる可能性を見たのではないだろうか。

なぜなら人類とは主人のわらじを自分の懐で温めておくことのできる、思いやりと配慮をもつ存在ともなりうるのである。それゆえにアヌンナキは地球を人類に任せてよいと考えたのではないだろうか。

地球はなぜ人間を第一人者と認めたのか

地球上の自然環境と共生をしていくという点を考えると、ゴリラやチンパンジーのほうが人間よりもよほど上である。もし彼らに地球の第一人者の地位を与えていたならば、現

在も地球は緑に覆われ、大気も水も美しく生物の多様性は今以上だったかもしれない。

しかしながらダーウィンの進化論に従えば、未だ地球の第一人者は石を砕いたもの、あるいは磨いたものを刃物として使う程度であっただけかもしれない。

それゆえ地球は人間を第一人者として選んだ。人類の祖先アウストラロピテクスの誕生が400万年前であり、46億年の地球の歴史からするとそれは未だつい昨日にもならないようなものである。すなわち人類は一日もたたないうちに急速発展し、地球の運命を左右するまでに至ったのである。

残念ながら今のところ人類は地球の望み通りには進んでいないと思われるが、人間自身の発展は他の霊長類と比べると断然群を抜いている。やはり地球は人間のその能力を見て、第一人者に選んだのではないだろうか。すなわち人間の能力をもってすれば、地球自体を更なる発展へとつなげてくれる、そんな可能性を人間に見たのではないだろうか。

サムシンググレートはなぜ地球に人間を誕生させたか。

はじめに万物の創造主サムシンググレートは己自身を知るがゆえに光を生み出した。そしてすべてはサムシンググレートとひとつであり、つながっている。万物は向上していき、もとのひとつに戻っていく。逆に言えばすべては大いなる意志のもとに存在しているのである。そして人間も魂の向上・成長によって大いなるひとつのものに帰っていくために存在している。

同様に地球もサムシンググレートと一体化するためにある。人間も地球も向上し、万物の一体化を目指している。本来人間も地球もつながっており、一体化したものである。しかしながら人間は未だに分離した感覚のままにるのが現状である。

ではなぜサムシンググレートはこの地球上に人間を誕生させたのか。それは人間の持つ可能性のために両者をパートナーとしたのではないか。それが一番の可能性を秘めていたから。なぜならば実は地球の波動も他の惑星の波動に比べてまだ荒く、人類の波動も移動できる生命体としてまだ荒い。しかしながらそこには未知なる可能性が同時にあるということ。すなわち地球の想造性と人間の想造性の組み合わせが一体化への可能性を一番に高めることができる。

すなわち人間の想像し創造するというその想造力の可能性こそが人類をこの地球での第一の存在としている理由である。

日本人とは

日本人はその国土の特徴、その歴史を通じて培われた特徴は、春は桜を見て喜び、秋に

は虫の鳴き声を風流とし、四季を感じながら自然と共生していける民族ということである。万物には八百万の神がいるとし、自然を神としてあがめその法則に従い、すべてに感謝する心を持って生きてきた。

江戸末期にやってきた外国人は、その日本人の人懐っこさ、礼儀正しさ、自然との共生の姿を見て、日本を一番パラダイスに近い国と驚いた。

しかしながら江戸時代には士農工商という身分制度があり、人は職業選択の自由はなく、移動の自由も限られ、更には穢多非人などの差別があり、現在の社会から見れば非常に暮らしにくいところも見られる。

その点現代社会は民主主義のもと、自由の概念があり、職業・結婚・住居の自由があり、人々の基本的人権は一応保障される。すなわち現代と江戸時代における過去、どちらにも長短があり、一概にどちらがよいともいえない。

現在の日本の自然環境は世界と同様、破壊尽くされようとしている。そこには日本人の自然はいつもそばにあり、共生を当たり前としていたがゆえに、自然について考える必要も機会もなかったこともある。これまで地球と自然はあまりに身近な存在であった。しかし今この地球の危機的状態を知り改めて再自覚する。

また日本は負の遺産として現人類として唯一の被爆国であり、またこれまでに公害による人的被害を受け、またバブル崩壊という金融危機を持った国である。

人間には学習能力がある。今こそ過去と現在のよさを組み合わせるべき時である。日本人は組み合わせ、受け入れる能力は秀でていく。機械類を組み合わせ発展させていく「カイゼン」能力は誰もが認めるところである。宗教でさえ、神道・仏教・キリスト教を消化し、日常のひとつとして当たり前のごとく受け入れ、無宗教化することのできる民族である。すなわち日本人には可能性が大いにある民族である。

人間は地球のお世話係

なぜ人間はこの地球上でこれだけの頭脳を持った存在であるのか。それは人間の持つ想像力によるためである。そして今この想像力にプラスすべきものが智慧である。人間はこの地球で生かされている。今のところ人間は宇宙空間に出てしばらくの間は滞在することはできても、永遠にこの地球を離れて暮らすことはできない。

けれども人間には智慧がある。智慧とは理性的なものであり、関係性を知ることができるものである。人間はこの想像力と智慧を持っていることの自覚が必要である。

そして人間がこれらの能力を持ってまずすべきことは「人間は地球のお世話係である。」ということを知覚することである。

人間は地球のお世話係ということの大前提にすれば、人間は謙虚になれる。例えどんな

に人間が豊かさを求めたとしても、まずは地球のお世話係であるという概念が先にあれば、一方的なエゴに走ることはない。そして今後人間はおそらくフリーエネルギーを手にする。そのときにこの概念があれば正しく対応することができるだろう。

この前提で人間の豊かさを求めれば地球と共に発展していくことができる。そこに人間の新たな可能性を見ることができる。

新しい時代はやってくる。

それは宇宙的規模で広がり、同時に多次元的な世界の訪れ。

この時代を迎えるにあって人間至上主義ではいけない。そのために人類はこれから禊を受けなければならない。それはもしかするとかなりの犠牲を伴う厳しいものかもしれない。人間は恐怖と絶望のどん底に陥る可能性もある。

しかしながらその際にこの「人間は地球のお世話係である。」という自覚があるかどうかで、その禊に対する対応もそしてその禊の強さ自体も変わってくるだろう。

人間よりも高次元の存在は確かにある。そして彼らは絶対的平和主義者である。もしかするとそれは人間を作り出したニビルに住むアヌンナキに再会することかもしれない。あるいはもっと多くの知的生命体と出逢うのかもしれない。そのとき人間はどう対応するのか心構えが問われている。

参考文献

「人類を創成した宇宙人」 セガリア・シッチン

「人類が変容する日」 エハン・デラヴィ

「マインド・コントロール」 池田整治